
マリエルとルシウス

結城由良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリエルとルシウス

【コード】

N9480V

【作者名】

結城由良

【あらすじ】

「繋がる絆」の番外編というか、後日談のSSです。

同じプロットでSSというお題 (<http://hp.kutikomi.net/thankyou-jimuso/?n=column23>) で書き始めたんですが、ちと落ちに失敗しました^^; お題的には失敗作ですが、話としてはけっこう好きな感じに仕上がったのであげときます。

(前書き)

このお題で昨日から何本か書いてるんですが、なかなか難しいですねw

手持ちのキャラに丁度いい関係のペアがない件。

マリエルとルシウス、この2人好きんだけど、まだ距離が遠すぎる><

概要

問・以下のプロットを元にSSを作成しなさい。

【起】追われる夢を見るA。

【承】Bに起こされる。

【転】夢の話をするBが笑い、Aが拗ねる。

【結】仲直り。

文字数は5000文字以内。

ジャンル・キャラは不問。

一次創作/二次創作/夢小説も不問。

BL/NL/GL不問。(タイトルに表記させて頂きます)

水の塔の長補佐官マリエルが、長の執務室をノックしても答えがなかった。
煙けぶりのような紫の瞳をそっとひそめて、声をかけてみる。

「ルシウス様、お届け物です。
入りますよ？」

手には果物が入った籠を持っており、戻ってまた持ってくるのは面倒だった。
鍵のかかってない扉は、マリエルが押すと、音もなく開いた。
重厚な姿をしている割に、動きは軽い。

「…ルシウス様？」

開けてすぐ、正面のデスクに突っ伏す主の姿を見つけて、マリエルの眉が顰められた。
つつかつかと、俊敏に傍に寄ると、状況を確認する。

…居眠りしていた。

半開きにした口からよだれを垂らしながら、
すかー

などと寝息を立てているのを確認したマリエルは、額を空いた右手で押さえた。

「…頭痛が」

ひどく整った顔立ちが、さらさらの金の髪の海に埋もれている様子は、それだけであれば、一幅の絵と言ってもいいくらいなのに、色々台無しである。

「残念な美青年」の二つ名は伊達ではない。

…いや、まったく、嬉しくないんですが。

さて、どうしたものか、とマリエルは悩んだ。

以前ならば、問答無用で頭を殴りつけ起こしたものだが、最近はマリエルも随分丸くなっていた。補佐官として、水の塔の長であり、飯といいながら長期に渡って塔主会議の議長も兼任しているルシウスが多忙を良く知っているせいでもあった。

（昨日は大国からの使節と夜中まで折衝してらっしゃったものね）

補佐官になった当初は、その奇矯な振る舞いに呆れ、馬鹿にしたものだったが、押さえるべきところは押さえているということに気がついてからは、一歩引いて評価できるようになった。

（まあ、バカ、なのは素だと思っけど）

アイラの事件を経て、彼の過去もかすかに見えてきた今は、多少の興味も湧いていた。

何十年も歳を取らない化け物とも裏では呼ばれていた彼の凄惨な過去を、彼を助けたという女性の曾孫アイラから、わずかばかり伝え聞いたのだった。

もちろん、本人から聞いたわけでもないので、知らない振りはしているのだが。

「う…ぐ…」

つらつらと想いを巡らせながら、手に持った荷物を柵に置いていると、健やかだった寝息が、いつのまにか、うめき声に変わっていた。

「い…や…だ…」

近づいて、顔を覗き込むと、眉間に皺が寄り、苦しそうな表情になっている。

ふむ、とマリエルは首を傾げつつ、ルシウスの肩に手を置いた。

「ルシウス様、ルシウス様、

大丈夫ですか？

起きてください」

呼びかけながら、ゆっくりと揺さぶると、ルシウスの目がうつすらと開いた。

潤んだ深緑の瞳が視点の定まらないまま揺れている。

「ルシウス様、ここは水の塔の執務室ですよ。

わかりますか？」

ゆっくり、含めるような口調で語りかけると、ルシウスの視点がようやく、マリエルの顔に定まった。

「あ、ああ、

マリエル、か…」

眠気を払うように頭を振って起きあがると、状況を把握したらしい。バツの悪そうな顔をして頭を掻いている。

「なんだかうなされてましたけど、
お具合は大丈夫ですか？」

問いかけるマリエルに、ルシウスは目を彷徨わせた。

「あ、あ、うん。」

「なんか、夢見が悪くてね」

「へえ、どんな夢だったんですか？」

踏み込むつもりはなかったはずなのに、

と、マリエルは自分の口から出た言葉にかすかに驚いた。

「あーあーうん、えっとなんだ、パンジャに追いかけられる夢」

は？

パンジャというのは、穀物の粉を平べったく焼いたシートで、たれをつけて焼いた肉と刻んだ青野菜を巻いた、この付近の郷土料理のことだ。広場の屋台で売られており、これが好きなルシウスがよく買いに行っては食べている。

「…なんですかそれは？」

マリアルが呆れた声で馬鹿にしたように言うと、ルシウスが口を尖らせた。

「いや、まじで、

こーんなでかいパンジャにかばあってでっかい口ができてさあ
ぐあーって追ってくるの」

手を上下に広げたなぞのジェスチャーで説明しようとする。
いや、わけわかんないから。

「毎日毎日パンジャばかり食べてるから、
恨みでも買ったんじゃないですか？」

「ええーパンジャって恨むのお？」

「…知りません」

なんだろう、心配して損した感がひしひしとする。
まったく、

とため息をついて、当の本人を見ると、なぜか優しい瞳でマリエル
を見ていた。

ああ、この人は…

と、腑に落ちる。

この人は、自分の苦しみを私に教えるつもりはないのだ。

そう気がつくと、なぜか胸が痛くなった。

だからどうだというのだ？

自分はただの補佐官で、彼の個人的な事情に踏み込む必要はまった
くないのだ。

「…アイラのお父様から、

良い品が手に入りましたのでお裾わけでも、

とのこと、こちらをお持ちしました」

とりあえずと置いておいた棚から果物籠を取りだして、ルシウスの

目の前に置く。

話題を逸らし、もとい、そもそもの目的に戻したマリエルの声は硬かった。

「あれね、いつも悪いねえ

お礼を言つといて」

一時魔術が使えなくなったアイラの諸事情を解決したルシウスへ、彼女の父親は頻繁に礼の品を寄越してくる。だから、その処理についてはマリエルも慣れたものであった。

「はい、すでに、ルシウス様のお名前でお礼状を返送してあります」

「さっすが、有能な補佐官、しびれるう」

それはいつもの軽口なのに、妙に苛立つ。

「補佐官として当然の仕事です」

だから、返す口調に通常より多めの棘が乗ってしまった。それに気がついたのか、ルシウスが、戸惑った表情をした。

「なんか、怒ってない？」

…もしかして、マリエルちゃん今日女の子の日？」

が、その口から出たのは最悪の台詞で…

「死ね」

このセクハラ男があ、

とエルボーアタックでルシウスを床に沈めると、マリエルは足音荒

々しく部屋を出ていった。

「あはは、失敗しちゃったかなあ」

いてて、と上半身を起こしながら、ルシウスが笑う。

その笑いはひどく自嘲的でさびしく、マリエルが見ていたら、後悔したかもしれない。

だが、そこにはマリエルはおらず、ただ穏やかな昼下がりの日の光だけがあった。

／＊／

ちよつと描いてみた正装姿のルシウスくんです。

画力がないせいで美形に見えないかもしれませんが美形なんです><

> i 2 9 4 9 4 — 3 7 9 7 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9480v/>

マリエルとルシウス

2011年10月8日08時29分発行